

才2回国際体育心理学会の概要について

東京農業大学 池 上 金 治

第2回国際心理学会は10月29日から、11月2日までの5日間、ワシントン市の国民教育管理センターで開催されたが、参加国はアメリカをはじめ23ヶ国で、参加人員160名のほかにオブザーバとして50余名が列席し、日本からは私のほか4名が出席した。

会議は5日間を通し、午前8時30分から夜の10時30分まで1日平均12時間のプログラムが計画され、主催国の意欲的な態度には、いささか驚いたが連日、会議終了後、われわれだけのミーティングを行なつたので就寝するのが、午前1時を過ぎるという状態で、肉体的にもオーバーワークを訴える人もあつた。学会に使用される言語は英語、スペイン語、フランス語を指定されていたが、ほとんどが英語によつて会議が進められ、ISS会長ヘルシオ・アントリ教授が中心となり、われわれ日本からの参加者は名誉学術委員に推薦される光栄に浴した。

しかし、大会の運営は委員長である北米体育心理学会長スレイター・ハメル氏(インディアナ大学教授)によつて精密な計画と配慮がなされ、分科会議議長代表にはフライアン・Jクラッティ氏(カルフォルニア大学教授)と21名の運営委員によつて、極めて円滑な進行がなされた。今回の研究テーマは「20世紀におけるスポーツと遊戯に関する心理学的考察」がとりあげられ、分科会は11部門に分かされていたが、発表形式は部門別に行なわず80余名の研究発表を全員が傾聴し、討論するというシステムで、効果的な方法が採られたといえよう。

特に8人宛が1グループを編成し、質問や討論もグループ毎に行なわれて応答されたので全員相互のディスカッションの機会が多く与えられ全会員からも好感がもたれた。私私は第6分科会で「体育学習経験の長短がパーソナリティ特性に及ぼす要因と推移につ

いて」発表する機会を得たが、11分科会を通して特に印象的であり、参考となつたのは第1分科会の「スポーツと攻撃性」と第7分科会の「知覚と運動学習」の部門で興味ある発表が行なわれた。各分科会の発表題目数を掲ると次のようである。

第1分科会

「スポーツと攻撃性」で公開討論形式が採用され、ジョン・P・スコット博士(動物学者)の「人間の攻撃性のはげ口としてのスポーツ」という一般テーマに副つた発表に対しエマ・マクロイ・レーマン博士(心理学教授)はスポーツ特有の攻撃性による教育的効果を強調して反論し、さらに論議者としてヘルシオ・アントリ教授、ブルス・フレツ博士、ゼームス・リーバマン博士などが心理学、精神医学、子供と家族とチームの立場から討議されたので有益な話題が提供された。

第2分科会

「スポーツと精神衛生」は6名の発表者であつたが講演者のエマ・マクロイ博士(アイオワ・ウェスリアン大学)の内容は共感をよんだ。

第3分科会

「スポーツ観覧者と競技者の行動及び相互作用」は5名の発表がなされたが「複合的な運動技術の習得と実行に対する観客の影響」は好評を博した。

第4分科会

「系統的分類の方法論と構想の研究」は11名の発表者があつたが「予想と反応スピードに関する実験デザインの効果」が印象的であつた。

第5分科会

「身心障害成人のためのスポーツと遊戯」は12名の発表者があつたが、特に注目すべき内容はなかつた。

第6分科会

「体育家のパーソナリティ」は14名の発表者がいたが「コーチの自覚と測定されたパーソナリティ」の発表に対し、会員より研究内容が貧弱で論文としての価値を認めないという発言があつて会場が騒然となつたことも想い出の1コマである。

第7分科会

「知覚と運動練習」は12の発表者で「スピードと単純動作の加速に関する運動残効」が圧巻であつた。

第8分科会

「卓越した体育指導者における心理学的問題」は8名の発表者であつたが特に新しい問題はなかつた。

第9分科会(1部)

「スポーツ、遊戯の社会心理学」は子供の遊戯の発達過程を心理学的立場から映画で撒影し、「新人道主義」というテーマで解説し、発表されたのは注目すべきであつた。

第10分科会(2部)

「スポーツと遊戯の社会心理学」は8名の発表者で「戦争と愛のスポーツ的ゲーム的様相」は多大の感銘を与えた。

第11分科会

「スポーツ心理学の概括的様相」は発表者10名であつたが「運動反応の短期記憶期間の傾向抑制」は多くの会員に多大の興味をよせられた。

なお、この学会の発表を通して痛感された事項を要約すると次のような問題が提供された。(1) 研究の方向が性格研究から実験調査を経て、態度や行動に対する初期的段階の研究発表が多く、特に研究内容も分化された1部分の本質を深く掘り下げて分析しようという傾向が強い。

(2) 行動や態度の結果を調整したり分析することよりも、行動しつつある現象に基盤を置いて、心理学的立場からの体育作用を有効適切に運用させるための方法論が研究されつつある。

(3) 研究発表の形式は研究目的、資料の考察、今後の問題点というような独善的な形式にとらわれることなく、研究調査の結果と現象を発表して、結論は参加者のディスカッションを通して方向づけをめていた。

(4) 発表時間よりも質問や討論に時間をかけて、学会の質的向上は会員の研究によつて樹立するという意識をもたせることに留意し、気軽に卒直に各自の意見が交換されている。

(5) 討論のメンバーは単に体育家のみでなく精神医学者、動物学者、心理学者、哲学者、子供の家族の管理者などを招待して、主題に関連した権威者の衆知を集めて、総合的な立場から問題を解決しようとする努力をしている。

以上は私の卒直な感想であるが、結論的には日本における体育心理学の研究水準は他国に比して劣つているとはいえないし、研究文献も、斯道の大御所、松井三雄教授をはじめとして、数多くの専門書も出版されており、アメリカでは体育心理学の専門書の極めて少ない現状からも意を強めた。勿論、この分野の学問的開拓は日、なお浅いので今後の研究が大切であるが、こうした学会などの国際会議にも、つとめて多くの人々が参加して、世界の体育指導者と意見交換し、体育の学問的傾向を察知することもきわめて重要であることを認識させられた。(11月19日)

才2回国際スポーツ心理学会に出席して 茨城大学 熱田 緑

国際スポーツ心理学会の開会式のあつた10月29日のワシントンは丁度晩秋初冬といった気候で、木々に紅葉して美しく緑の芝生に紅葉した落葉の舞うのが一入風情があつた。

秋とはいえ、いお祭の様ににぎやかなメキシコから静で落着のある上品な感のワシントンにきてホットした気持と寒さが身にしみた。学会の会場は宿舍のY.M.C.A.から歩いて

行かれる距離で大変便利であつた。毎日通る公園には野放しのリスが走り廻つていて声をかけると前足をあげて立つ恰好が可愛らしくて何度も声をかけては写真にとつて楽しませてくれた。会場のNEAビルは大きな立派なビルでその地下に会議室があつた。小じんまりした会議室で一体どの位集るのかと思つていたら開会式には40人位集つた。演説が行われ続いて報告が各スピーカーにより行われたが毎日約8時40分から始まり昼休み、夕食休みの時間はあつたが夜10時半迄の長時間には一同疲れ気味であつた。それに短時間に盛沢山のことを話すので早口にまくし立てるのは日本の学会と同じでテーブルコーダを用意している人もかなり見受けられた。

中間の休みには会場の一階にしつらえたコーヒー、ケーキの処で各自立ちながらの話し合いが会場の雰囲気のをやかにしていた。日本人グループの処には代る代るいろいろの国の人かきて竹下休荘を知っているか、シスター松延を知っているか、シスター飯塚を知っているか、シスター栗本等日本人で外国を訪れた人の名前をあげて話にきてなかなかぎやかであつた。又何年か前に東京へ行つたとか、来年行く予定とか社交の場となつて楽しい一時であつた。

日本の発表者である池上先生の「競技に於ける性格とパーソナリテイの変化」の発表もスライドを使つて堂々と説明されて多くの人々の拍手を浴びた。これからも日本から多くの方々の発表を得たいものと思つたことであつた。英国の方の発表の時スライドの説明に熱が入つて思わず演壇から落ちて一寸驚かされたがその様な時でも「前に一杯やつてきたんだろう」というやじがとんで固苦しい空気もとび大笑した一幕もあり、アメリカという処はユーモアのある国だと感心した。

最後の日は閉会後お別れの昼食会がレストランで開かれ一日御馳走になつたが飛行機の時間が迫つて途中で失礼して飛行場にかけつけた。昼食会は別に挨拶もなく食事となり自由に話をしたりして、あつさりした会で大変気楽であつた。ワシントンは人種差別の少ない処ときいたが黒人が多く、半数以上ではないかと思われる程で何処へ行つても黒人が目についてアメリカの黒人問題を肌で感ずることができた。

会計報告 昭和43年9月

I 収入の部	
41年度繰越金	2,2620
42年度会費	7,400
(103名中37名分)	
42年度後期補助金	5,000
別 息	161
計	35,181
II 支出の部	
曲り角印刷費	8,505
通信費、郵送費	5,550
計	14,055
III 残 金	21,126

体育心理学研究会会報

「曲り角」

昭和43年12月15日発行

代 表 鈴木 清

編 集 松田 岩男

近藤 充夫

杉原 際

連絡先 東京都渋谷区西原1丁目40番地

東京教育大学体育学部 体育心理学研究室

体育心理学研究会

電話(460)0511 代内 36